Osaka University Knowledge Archive

Title	＜翻刻＞入江昌喜　久保之取蛇尾　後篇　下
Author(s)	
Citation	語文, 18, p. 25-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68505
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

久保之取蛇尾

後篇

下

久保之取蛇尾

俚諺雅証目録

からすき すだ〳〵 なで切り
いつかひ
手足えびのやうな
御内方
水の米
手ごろ
ふところ子
いねつむ
福引
手まり
いしなご
おつぼ
節分の柊いはしの頭 鶇ヲ喰
つめたき
いひかはし
手をおつかき足をくはびら

たしなし
うちまき
酒酔本性わすれす
手振り
よそう
酒のかん
そで
小豆粥にて札を押ス
はねつきかぞふる
はじき
ひゝな遊ひ
なぞ〳〵 訓義
こはだか わゝしき
うちがひ
手をすつて頼む
手足をえだ

女をうまそうな
さめ〴〵と泣 しく〳〵 おう〳〵 おひ〳〵
縄にもかゝらぬ うつけ
へつい
あつかまし
舟のあし
たぶさ
ちやうしがしら
所ぼつそく
きう〳〵いふて笑ふ
おとしだね
ほゝかまち はる
みゝずかき鳥の足形
せはしい
大こく
あはひの貝の片おもひ

玉むしの恋
口あかさぬ
ゑいや〳〵
千箱の玉
恋 ばか
尻ふる
おき おきをわるを忌ム
ふすべる すねる
せゝなぎ
めかけ
何ヅク
ゆかは
てゝ
ほゝづきふく
人の情は世にありし時
づぶり ざぶり だぶと

しぶ〳〵　かひつくる
わらすべ（とうしみ おすへる）　どつこも（狂歌）
ほゝばる　ふさふ　ふさはぬ
あたゝき（并シャリ）　さいで
牛に引れて善光寺参　子を捨る藪はあれど
誉る詞によう〳〵と云　よんべ　よさり
きのふ　あす　あさつて
寸白虫国の守になれる語（并坂迦ヒ）
あみざこ
紐をひぼといふ　色めく
こなす　しこぶち
露ちりほど　露ほど

久保之取蛇尾

何事もふるき代のみぞしたはしき、今やうは無下にいやしたゞいふ言葉もくちをしうこそなりもて行なれといひしも、すでに四百年のむかしへとなれは、いよ〳〵世くだちゆくまゝにみづかきの久しき代よりいひつぎし、いそのかみのふることは今の世のことのはぐさの、其苗をみだすがことくのみなりゆけは、草葉の露の玉〳〵に、いにしへのことぐさのこれるもあれど、そはそれとだに、知る事なきぞくちをしきや、そも〳〵あがくには、外国とはことにして、かけまくもかしこきあまつひつきしろしめす事の、まさ木のかつら長くたえすしておましませはこそ、千早振神代のことの葉も、今につたふるはあるなるへし、華夷かはる〳〵おさむる国なとはかくあらんやは、さればいやしきすごが口のはにも、いにしへのことの残れるは、いとめてたきためしにこそとおもふに、是をかいあつめんの心つきて、さきにもいさゝか其端しをしるし今猶ふる言をひろはんとすれと、世のことの葉のさはなる中に、うどんぐゑをもとむるがことし、まことにくだをもて空をうかゝひ一ツのけしもわたつみを汲んとするにひとしく、水海にしほたるばかりをさなきすさひとぞいふへけれど、千さとの道も足もとよりとこそきけ、海河は細きながれをいとはずとぞいふめるいさゝかも今の言をもていにしへをおし、いにしへの言を見て今をしへは是いにしへをこのむのはし成へし

○神代紀素戔嗚尊乃以韓鋤剣斬レ蛇とあり、私説其剣の形、今農具の犁と、いふ物に似たる故の名なるへし、しからば今の犁てふ物、既に太古にもありて、後剣にも名付し成へし、いと久しき物なり、又今俗物を切て段々とするを、すだ〳〵に切るといふも同巻に寸〻斬其ノ蛇ヲとあり、又俗物をなで切にするといふも、古語なり、旧本今昔物語巻廿三云、此薯蕷ヲ撫切リニ切ルと云々（頭書、日本紀纂疏曰韓鋤猶レ言レ犁也剣ノ形類レ犁云々）

○今俗物の少を、たしなし、たしない、なといふも、古事記仁徳天皇段云、於国中烟不レ発、国皆貧窮云々、又、日本紀にも、仁徳天皇六十七年○布レ徳施レ恵以振二困窮一云々、たしなきの俗語古語なる事知るへし

○女子の詞に、物の大なるを、イカヒといひ、或はイツカヒと云、大系図に紀氏　小足臣、塩手臣、大口臣、大人、此大人を、大人と訓す、是にてイカヒの義知るへし、イツカヒと、ツを加へていふは、猶つよく云意也、しかとヲしつかと、ひたとヲひつたと、なとの例なり、物の数多キをイカヒコトといふも同義、紀大人は天智紀十年御史大夫と見えたる人なり

○女子の詞に、米をうちまきといふは、ことたかはぬに似て誤なり、うちまきとは神なと祭る時の散米をいふなり、なへてのよねを、うちまきとはいふへからす、うつほ物かたり藤原君の巻云、はらへすとも、うちまきによねいるへしと云々、うちまきといふが、即米の義ならば、うちまきによねいるへしといふへからす、此文義に知るへし、源氏物語、紫日記、等にいへるも皆散米の事也

○今俗寒気にふれて、手足の赤くなりたるを、海老のやうなといふも古語なり、うつほ俊蔭巻に、ちいさき子の、雪を分て、足手はえびのやうにてといへり

○俚諺に酒の酔本性わすれすといふも、同初秋巻に、うへ、御かはらけはしめさせ給ひて、ゑひ人どもわすれぬ事ありとか仰られてと云々　古き諺と見えたり、文人之酔不レ能レ蔵二其辞藻一武毅之人酔則不レ能レ隠二其剛勇一といへるも本性をわすれぬをいへり

○人の妻を、御内方といふも、同楼のうへ下ノ二に云、むかししげのゝわう、ふるのあそんのないほうは、我をばにいまそかりし云々

○今諸候の行列に、御馬前などに、立ならぶ歩侍を手ふりといふも古語なり、同祭の使の巻に云、おほん馬とも引たて、手ふりどもたちならみたりといへり

○盆供に、水の米とて、わせのよねを用る事も、ふるきためしなり、初秋の巻に、御ぼにには、わせよねをおほせつかはす

と云々

○器に食物を盛ルを、今、俗よそうといふも古語なり、同蔵開巻に云、まづこのかゆす丶りてんとて、そへたりつるつき(杯)ともに、よそひてみなまいる云々

○俗よきほどなる物を、手ごろなといふも古語なり、同巻に云、上達部、みこたちの、みむすめなれど、おやもものしたまはす、たゞおとゞにかゝり給侍しかば、今かゝり給へど、手ごろの家なんなければと云々

○酒を煖(アタヽム)ルを、かんするといふも古語なり、同国譲ノ下に云、さけそん(樽)にいれてすへて、御かんしてわかしつゝのますといへり

○ふところ子といふも、同巻に云、いでや子ども、廿人にかゝりてもて侍れど、そこをば、ふところといふばかりに、おふしたてと云々

○俗疏略になるを、そでになるといふも、同楼のうへの巻に云、京わらはへを、よう(欺)しほり(欲)かり侍りつるに、おやあり、そでになさんと、はゝにて侍るものゝ申しかは云々

○世俗に、正月三ケ日があひだ言忌(コトイミ)して、ねるを、いねつむといひ、おきるを、いねあくるといふも、近俗ならす、長明四季物語十二月の段に云、つとめてのとしは、かりそめにたゞいふひとふしも、やんごとなくことふきて、伊勢、賀茂山、野々宮、など思ひやりふかうたどられて、いねておくをも、いねをつむといひ、又ぬるをも、たはらかさぬるといひ、もちひをかゝみといひ、なくを若水あくるといひ、うたるゝを、こゆるといひ、かれいひを、あしはらといひ、其外何となきそゞろけきことくさはやゝあとなき御つほねのうちよりまなひとりてしことなるへし云々

○正月十五日に、小豆の粥を食し、又其粥にて、諸社の札を押す事も、同書云、十五日のつとめては、御づし所の御かゆ奉れる、七くさの御あつものも、けふまでとゞめおきて、ひとつ御かまにて、とう(調)しなして奉れば、しるしばかり、御いきふきさせ給へり、此事推古の御代よりある事にて、あかきは陽の色をかゝせ給ふ御事にて、あづきの御かゆたまはらせ

給ふとぞ、冬の陰の余気を陽徳にて消させ給ふこゝろなるへし、山の上のおくらといふ人の奉れる歌に、春くれはあかきおものゝあつものもめくみにもれぬ御代にあふらし（頭書、此憶良歌出所可考）とよめるも、あかきおものは、あづきの御かゆなるへし、又松の尾の神人、けふのひるつかた大内にまうでゝ、かんつかさ（神祇官）の伯にものして札奉れは、我（賀茂山ヲサス）み山のあふひの根をね（掘）ごして、其ねごせるを、そく（続飯）ひのうちにいれて、御札をもやのはしらに伯してはらせ申せば、又つぎ〳〵のたよりあるべきかたにも、はらせ給ひ、なへて公卿の家〳〵にも、此ためしまねぶへし、其そくいひは、七くさのあつものゝ残れる、又けふの御かゆをひとつにすりまぜて、御札をおさるゝあり、定れる例は、御いきふれさせ給へる御ましすべりたるにて、おす事とこそ、是もはら、いかづちいなづまのたゝりをやらはせ給（追）んとの、松の尾の御ちかひおはしますとの御事なるへし云々

○又十六日は、やぶいりといひ、或は節（セチ）と称し、親戚宴会して、子女福引といふ戯をなす、今按に、類聚国史巻七十二云聖武皇帝、天平三年正月辛丑（正月朔丙戌ナリ辛丑ハ即十六日ナリ）天皇御（レシ）大安殿（ニ）宴（ス）五位已上（ニ）晩頭（ニ）移（ノ）幸皇后宮（ニ）○以賜（テ）酒食（ヲ）因令（ムトテ）採（ヒネリフミ）短籍（ニ）書（ルニ）以（テ）仁義礼智信五字（ヲ）随（テ）其字（ニ）而賜（フラ）物得（ルヲ）仁者（ニハ）絁也、義者（ニハ）糸也、礼者（ニハ）綿也、智者（ニハ）布也、信者（ニハ）段常布也、云々 短籍（ヒネリフミ）をとるとは、今所謂（クシ）闇どり歟、固如此形をいふにや、是今俗のいふ福引に似たり、又讃岐典侍日記云、扇引、こよひはさはと仰られしかは、あけんが心もとさに、こよひとおもふに、人たちのけしきの、くらくて見えざらんこそ、口をしうさむらへと申しかは、つとめて明るやおそきとはしめさせ給て、人たち召すゑて、大式三位殿、しづめてゐあはれたりしに、先ひけと仰られしかば、ひきしに、うつくしと見しを、えひきあてゞ、中にわろかりしを引あてたりしを、うへになげ置しかはかゝるやうやあるとてわらはせ笑ふ云々、此時已に、扇引といへり、是等の事をまねひつたへて、今の福引の遊びはあるなるべし

○今民間児女の戯遊、正月にはねをつきかぞふるに

ヒト。フタ。ミ。ヨ。イツ。ムウ。ナ、。ヤ。コ、ノ。トヲといふ是も古語の残れるなるへし 按（ル）に鎮魂祭神楽歌、次（ニ）云

ヒト。フタ。ア古語三ヲアト云シ歟ヨ。イツ。ムユウトユ通今俗所謂ムユ日ナ、。ヤ。コ、ノ。口峰西川行幸和歌序なゝつの年ことゝのゝ秋ト書リタリヤタリハ十ノ古語ニテ足ル之義歟トヲハタリノ転したる歟

十度読レ之毎度中臣玉結也云々　此古語の遺称なるへし、鎮魂祭之事、旧事紀天神本紀天孫本紀、等をかうかへあはせてしるへし

○手まりといふ物も、いにしへより甄ものと見えたり、四十二物詞歌に貝覆と、手鞠と、いづゝぎ　皇宮大夫

〻黒髪のみたれてさはくまりよりも貝におほへる袖はなつかし

又増鏡うち野の雪の巻に云、摂政殿さへわかくものし給へは、よるひるさむらひ給ひて、女房の中にましりつゝ、らんこ、貝おほひ、手まり、へんつぎ、などやうの事どもを思ひ〳〵にしつゝ日をくらし給ふと云々

○小石にて、はじきといふ遊ひをするも、今俗ならず、いと古代より伝へし戯なり、うつほ物語祭の使の巻に云、中のおとゞに、かうしんし給ひて、をとこ女かたわけて、石はじきし給ふといへり、和名鈔雑芸類云、弾碁一名ハル指石始レ自二魏宮一云々　是歟同書に旖和名以之波之岐是は征戦之具也石弾の名是にならふ成へし

○又いしなごの遊ひも久し、拾遺集に云、東宮いしなどりのいしめしけれは、三十一をつゝみて、ひとつに一ト文字を書付てまゐらせける云々　又栄花物語に、御前にめしいでゝ、碁双六うたせ、へんつがせいしなどりせさせて御覧すと云々、赤染集に女院の姫君ときこへさせし頃、いしなどりの石めすをまゐらすとてとあり、散木集に、伊勢斎宮に侍る頃、いしなどりの石合せといふ事を、せさせ給ける後、ちいさきさうしのいしなとりの石のおほきさなるを作りて、十ヲの石に一ト ツ、書付侍りける十首の中

君かためゆた野をわけてひろひつる千引の石にたれかあふへき

○雛遊ひ事尤久し、崇神紀に武埴安彦が謀及を告る歌に、比売那素寐須望といへるを、釈紀云、為二児女之遊一今案比比奈遊也云々　此説いかゝ野客叢書巻七曰沈約宋志謂、旧記郭虞有二三女一、於二三月三日一俱亡、故俗忌二此日一、皆於二東流水上一祈攘祓潔云々　恐クハ雛祭此郭虞が事による歟、今児女紙人を制し甄も、もと贖の義にて祓の具なり、加茂保憲女集に

〻大ぬさにかきなてなかすあまかつはいくその人のふちをしるらん

此あまかつといへるは、今遁子(ハツ)雛といふ物のたくひなり、加茂保憲は清明か師にて、天文陰陽の祖也、其人の女としてかくよめるにしるへし、又和泉式部

あまかつにつくともつきしうき事はしなとの風そふきもはらはん

其外三月上巳のはらひの事はうつほ物かたり菊の宴の巻に云、かくてやよひの十のよ日ばかりに、はじめての巳の日いできたれば、大将どのは、上巳のはらへしに難波へ、かた〴〵をとこきんたちものこりずくなくおはします云々 源氏須磨巻にも、巳の日のはらひの事見えたり、本朝もいにしへは巳の日を用ひしがのち〳〵三日を用るも、もろこしの例にならふ成へし、今祓の義なく、酒飯をまうけ宴会をこととするは、俗曲水の宴に混合するなるへし 曲水宴ハ顕宗帝元年始 又雛を九月に翫も漢人祓除亦有在秋間者とも見えたれは共に祓の義なるへし雛遊ひの事ふるく物に見えたるは、うつほ物語楼のうへの巻に云、ひいなあそひなど、 もろともにして見せ奉り給ふとあり、又斎宮女御集に、 うちにおはせし時ひゝな遊ひにと云々、 蜻蛉日記に、かとりのひゝなきぬ三ツ縫たりとあり、中務集にもひゝなあそひにと見えたり、御堂関白集に、たかまつの君の御もとより、ひな屋まゐらせ給ふとも、又若宮のひいな屋、さま〳〵の物うゑなとして云々、源氏、枕草子に見えたるはさらなり、又此雛の仮名、うつほ物かたり、源氏、枕草紙などにはひいなと書、斎宮女御御集、蜻蛉日記、中務集等には、ひひなと書たり、いづれか是なるをしらず、まして正字は無所見、契沖師いはく鳥のひなといふ時、ひゝなといへる事見及ねど、ひゝと聞へて鳴ものなれは、ひゝなきを略して、ひゝなといひて、それを猶略してひなといふにや云々、

今案にうつほ物語藤原君巻に〻春を出てねくらもしらぬひな鳥もなそや暮行ひよと鳴らんとよめり

契又いはく、鳥のひなは、ちいそういたひけしたれは、装束の形などを、ひながたといふ、是を思へばひゝなも、屋形人形より、よろづちいさういつくしきを、雛にたとへて名付たるにこそと云々、 契沖はひゝなの仮名を同心せられし歟、今案に釈日本紀に比比奈と書るも拠あるにやあらん

雛遊の異説、寺島氏云、或書云、敏達天皇二年春正月、侍従奉レ勅ニ雛像一、太子親取ニ雛像一分ニ其男像女像一 下略

今案に、此或書といはれしは聖皇本紀の説にて、信用にたらざる物なれは今悉こゝに載せす

多田氏云神功皇后三韓ヲ平伏シ玉ヒ筑前国宇瀰郡蚊田ニ漂着シ玉ヒ此所ニテ誉田天皇ヲ御誕生マシマシ、夫ヨリ御帰京アラントテ、難波津ニ御船向フトイヘトモ、事アリテ御着岸ナリカタク武内カ母方ノ本国ナレハ紀州名草郡粟島着船シ玉フ

今案に、紀氏系図に武宿禰者紀伊国名草郡宇治郷人母山下陰女云々しかれは其由緒はさる事なれとも皇后の御船紀州名草郡に着給ふ事日本紀古事記旧事紀等に見えす何に拠て書れしにやもし粟島雛、付会之説をまうけんための杜撰にやいふかし、日本紀云命ニ武内宿ニ懐テ皇子一横出ニ南海一泊ニ于紀伊水門一皇后之船直指ニ難波一于時皇后之船廻テ海中一以不レ能レ進云々其後広田生田住吉等の神を祭り給て則平得レ度レ海ヲ皇后詣ニ紀伊国一会ニ太子於日高一云々名草郡と日高郡は南北之違なるへし

然ル処御産日久シク、御船中ニマシマセバ、シキリニ御帯疾発テ、医神少彦名命ニ是ヲ祈リ玉フ、御身バカリニテモナク、御子誉田天皇ノ御為ニモト、御撫物ヲ作テ、御形代トシ、海流シ御安全ヲ願ヒ玉フニ、玉躰安全、皇后モ御帯下平愈マシ〳〵ケリ、此故ニ御産筑前ノ蚊田ノ地名ニヨセテ、此所ヲモ加田ト云、今ノ世蚊田粟島ト云ハ是ナリ、サレバ此時御母子ノ御形代、鄙ノ旅ニ痩玉フ御形ユエニ、雛ノ字ヲ書テモヒイナト云ヒナノ義也

今案に形代は和名祭祀具偶人ヒトカタ即神功紀蒭霊をクサヒトカタと訓しいにしへ形代をヒトカタといひし事明らか也鄙の旅にやせ給ふ御形なれはヒナといふとは迂遠なる名目義も又通せすしてうけかたし雛ノ字を書てもヒイナ云ヒナノ義也とは猶以其義通せす

サレバ、粟島ノ社ニヒナヲ捧テ女人ノ病ヲ祈ル事、此時ヨリノ起原ナリ、偖コソヒナハ夫婦ニアラス、御母子ノ御形ナリ、一ツ身着タル童躰ハ八幡宮ニシテ、前張キタル大君躰ハ神功皇后ニテゾマシマス云々 下略

○雛遊ひの具に、飯盛小器を、おつほと云も、うつほ物かたり国譲巻云、宮たちの御まへに、沈のをしきして、るりの御つ

ほにてものまゐり給ふ云々 契沖いはく、御つほとは、稚子の物くふごきの名也といへり、今云おつほの名しるへし

○なぞ〳〵の遊ひも久し、拾遺集に、なぞ〳〵ものかたりしける所にて我ことはえもいはしろの結ひ松干とせをふともたれかとくへきとあり、玉篇謎米閉切隠言也とあり、和訓の意は、なんぞ〳〵と問かけて、其意をあかす故、なぞ〳〵といふとそ、なんぞをなぞといふは、古今集に、なそ世の中の玉たすきなりとも、なぞわかこひのかひよとぞなくともよめるがことし

○節分の夜門戸に鰯のかしら柊をさしはさむ事、土佐日記に、けふは都のみぞおもひやらるゝ、こへ(小家)のかどのしりくめなはなよしのかしら云々しかれはいにしへは、鰯(ナヨシ)のかしらを用しと見えたり、又杠谷樹(ヒヽラキ)の事、今案に和名鈔(ニ)石楠草 和名トヒラノキ 俗云サクヤムサ 云々、東雅云、石楠草はいにしへ除夜、民家の扉(トヒラ)に此木をさせば疫気を除ふといへりと云々、しかれは此木を和名トヒラノキといへるも、扉にさしはさむ故成へし石楠草は、今俗にサクナケといふ物なり、今も大峰にまうづる者これをとり帰りて門戸にかけ置て、疫気をはらふといへり、いにしへの遺意なるつし、されはナヨシを誤りてイワシとしトビラノキを誤て、ヒヽラギを用る事になれるにやあらん、トヒラノキ古く歌にもよめり、範兼童蒙抄云山寺ノ南面テニ、石楠草ノアリケルヲ、客人ニ是ハ知リ玉ヘルヤト問ケレバ、トビラノキトナン申トイヒケレハ、坊主ノヨメル

ウエタテヽアケクレミレトシラサリキトヒラノキトハケフソキヽツル

類聚抄にありと云々、さて鰯ひゝら木を用る事も又既に久し、長明四季物語云、いわしのはさみもの、ひらきのほこは、なやらふ家には、百敷ならてもある事なれとも、大内にはかにもりのつかさ、例としてつかうまつれり、此なやらふ事は、もろこしにも侍れと、わきて我国には、神たけのすへらきの六と世の春より、ものし給ふ御事にて、いみしき御ためしなり、ひゝら木は、我神の社の、あるはみぞろの池のあたりより奉る事、定れる故実となれり云々、又節分に鵜鳥(ウノトリ)を喰事も、同書に云、ついなの夜は、をけらのもちいひ 五条天神勝ノ餅ノコトナルヘシ つぐみの鳥など焼て奉り、御かれいひのまはりに奉れば、是もものゝけ、えやみ、をやらびぬへき本文侍るとなん

○俗に声を、こはいろ、こはづくる、こは高なといふも古語也竹取物語に云、かくや姫いはく、こはだかになの給ひそと云々 旧本忠峰集に〻山さとの秋こはたかになくものはつままとはせる鹿にそありけると、よめり遊仙窟大語と書り宇治拾遺第二清徳聖千手だらにを、こはだえもせず誦し奉りといへり、又こは高なるを、わゝしきといふも、増鏡浦千鳥の巻に云、行幸の当日に、左大将内経、花山院右大将定行、列をあらそひて、随身どもわゝしくのゝしれはと云々

○冷をつめたきといふも、俗に似て俗ならず、玉葉集に

〻雲をいてゝ、我にともなふ冬の月風や身にしむ雪やつめたき

とよめり、弁内侍日記に、南殿のかたざまにて、遊ひしに、左衛門の東のかたに、霜のしろくさえたりし、さむくつめたさかぎりなかりしも面白と云々 又云、次の日くれほどに、かれより、うはがきにはあしつめたの御かたへとかゝれたると云々

○今あき人なとのもてあつかふ、うちがひといふ物は、もと鷹野に出る犬飼などのもたる助飼袋といふ物にもとづけるなり、今打違なと書は誤なるへし、定家卿鷹三百六十首に

物数をしつるしるしに犬やりのうちかひ袋うちかひもなし

犬の鳥を追出して、かみたつれは、飯にこぬかをまぜて、一づゝ飼ふを、うちがひといふ也、それを入るゝ物故、うちかひ袋といふなり、今は金銀銭などを入もてありく物とす、されどゐなかうどは、こりめしなどを入るゝ事有、却而古意を存に似たり

○或人問云、男女の中に、おもひかはし、いひかはし、などいふ詞此かはしは、かよはしの中略にて、通の字歟、即曰さもあるへし、但し、今いひかはしといふ、語意を思ふに、通はしにては、すこしかろくやあらん、和名鈔に肥後国、合志加波志 此義なるへし。

○今俗人を頼むに、手すって頼むといふも古語なり、竹取物かたりに云、竹とりをよひ出して、むすめを我にたべと、ふ

しをかみ手をすりの給へは云々

○俚俗、手の大なるを、熾斗のやうなるといひ、足の大なるをくはびらといふも古俗なり新猿楽記云、手如鉄釿足如鍬枚一といへり、和名鈔跗アナと有、アナヒラハ足枚也ナとノ通ス枚ハ平ナリ釿ハ和名出農具一熾斗ハ釿ヲ誤シナリ鍬枚ト釿農具ヲ対シテイエルト見エタリ又太秦牛祭祭文云、柊槌頭仁木冠乎戴支久波比良足仁旧鼻高乎絡付云々尤古キ諺なり、世伝云、牛祭祭文ハ、伝教大師作といへり、新猿楽記ハ学士藤明衡作云々

○鄙俗の語に、手足をエタといふも古語也、水鏡武烈天皇の段に、四ツのえだを木の枝にはり付てとあり、其外古ふみともにいくらも見えたり、和名鈔肢體和名衣太云々契沖師云与枝條同訓四肢之於レ身猶如木之有枝條云々

○俚諺に、よく肥たる女などを見て、うまそうなといふ、万葉集作者に、少令史田氏肥人といふあり、是等の訓よりおこる歟

○児女の談に、もろ〳〵の虫、玉虫を恋ふ、玉虫いはく、ともし火をもりて来らんものに逢んと、故にもろ〳〵の虫火をとらんとして死すと云々此事近俗ならず、古今集第十一夏むしの身をいたつらになす事もひとつおもひによりてなりけり教長卿此歌の註云、世俗に玉むしの火をとりて来らん虫にあはんといへは、とりにくとて、火に入て身をほろほすなりといへり、たしかの事ならねど、此歌は其心と聞えたりと云々、いとふるくもいひ伝へし事としるへし伊勢集に

夏虫のしる〳〵まとふ思ひをはこかぬかなしと誰か見すらん

○世俗に、いたく泣を、さめ〳〵となくといふは、雨のふることく泣といふなり、雨々と書へし、古今集春下大伴黒主、春雨のふるはなみたかとよめり、又しく〳〵泣といふも、近俗ならす、右京大夫集に云、はかなかりし人の、水のあはとなりし日なれは、れいの心ひとつに、とかくおもひいとなむにも、我なからんのち、たれかこれほともおもひやらん、かくおもひし事とて、思ひいづへき人もなきがたえがたくかなしくて、しく〳〵と泣より外のことそなき云々、又おひ〳〵といふて泣といふも、讃岐典侍日記に、堀川院かくれ給し所に云、たゝおはしますらん所へ、我を召せや、おひ〳〵とく

どきたてゝ泣るゝ音すと云々、又海士の刈藻物語に云、ひきあけて見給へは、からだもなく、紫雲にうつり給ひぬ、ひしりかなしくておう〳〵と泣給ふと云々

○利口なるを、人に口明さぬといふも俗ならす、源氏はゝ木の巻に云、ざえのきは、なま〳〵のはかせはつかしく、すへてくちあかすべくなん侍らざりしと云々

○諺に、いたくよはりたるを、繩にもかづらにもかゝらぬといふ、顕宗紀云、気力衰邁、老髦虚羸要仮扶繩不能進歩云々うつけ者なといふもこゝに知られたり、神功紀無実とも書り

○俗、人群集する時、ヱイヤ〳〵と云、今案に、内宮六月十五日荒蠣御贄神事歌云我君乃御倉之山爾塩乃満如富古曽入座、恵伊耶、恵伊耶、是等の古語の遺れるなるへし

○竈を、へついといふも古語なり、神楽歌に

止与倍津以、美遊比須良志久堅乃と云々

○千秋万歳千箱玉といふは宣化紀白玉千箱といふ語あり

○俗に、事繁をあつかましきといふ、散木集に

〻世の中のあつかはしさをあせかけは黄なる泉に思ひけぬへし

とあり、マとハと通韻、是今いふあつかまし歟又別意有歟

○範兼童蒙抄云、白毫式、云天竺に術婆迦と云童子あり、其母年頃后につかふまつりけり、此童おもはすに后を見奉りけるより、いかてと思ふ心つきて、人しれずいもねす痩ゆきけり、母あやしみてとへど、いはずして物おもへる気色あらはなり、母のいはく、何によりてか我にかくすべきとせめければ、ありのまゝにこたへけり、母思ひめくらしていはく、江のほとりに行て、日毎にいをゝ釣れ、我取次て后に奉らんとをしゆ、是によりて日毎に鯉を釣てきたれは、母これを后に奉る事三とせになりぬ、后志のふかき事をあはれひて、よきひまにとひ給ふ、いかなる事を思ひてするわさぞと、母おそれ

ながら、此童のおもへる事をもらし申、天竺のならひ、心に思ひ言葉にいひ出る事を、たがへざりければ、あふへきよしを契り給つ、后たよりをえん事かたけれは、はかりことをなしてのたまはく、術婆迦先自在天神にまゐり、其宝殿のうちにかくれをき、参りて逢んと契りて、みゆきして自在天神の宝殿に御輿をよせて、一夜すこし給ふ、人しつまり夜更て后術婆迦かをる所に行給ふに、ね入てしらす、其しるしに玉のかんさし一すぢを置て、輿のもとへ帰り給ぬ、又行給へるにおとろかす其しるしに又かんさし一すぢを置て帰り給ぬ、こゝに母、術婆迦にとふに、寐入ておほえず、たゞ此玉簪はかり有とこたふ、母、今は力およふへからずといふを聞て、術婆迦胸より火出きて、もえてけむりになりてうせぬと云々、彼鯉を釣て、ことを、通せしより、こひとはいふなり、もろ〳〵の恋のおこり、此術婆迦よりはしまれり云々、又恋にもゆるおもひ、恋のけふりなといふも、此事によれり六帖に

こひ〳〵てひとこひ〳〵に恋しなはもえん畑はこひの香やせん

此術婆迦が事、康頼宝物集にも見えたり、又俚語にバカと云言葉も、此術婆迦がことよりおこると、仙源抄に見ゆ一説東雅云癡をバカといひ、無智をバカラシなと云は、梵語と声音通す、梵に慕何を翻して、癡といひ、摩訶羅翻して、無智といふと云々

○万葉集第七

しまつたふ足はやふ船風まもりとしはやへなんあふとはなしに

童蒙抄に此歌を注して、舟の腹をあしといふといへり、今船に物積たる多少によりて、船の足が入る入らぬと云詞近俗ならす

○今俗に、女のなまめきありくを、尻ふってあるくといふも、万葉集第十八に

〻さと人の見るめはつかしさふるこにさとはす君かみやてしりふり

佐夫流子は遊女の名なり、仙覚抄云、さとはすとははやくとふ也、しりふりとは、あるくとて尻をふるなり云々

○俗髻をタブサといふも、景行紀頭髻と見え、崇峻紀作四天王像置頂髪とも見えたり

○今俗、炭火をオキといふ、日本紀私記炭火オキビと訓ス古語なる事知るへし、和名鈔云熖熄和名於岐比熱灰新火也云々 新撰万葉に人緒念心之熾者身緒曽焼烟立砥者不見沼物幹、小町は、おきのゐて身をやくよりもかなしきはともよめり又炭火を割ばわろしといふ俚諺も古く見えたり信明集にへ手つさひに火桶のおきやわりにけん恋しき人にあはぬころかなとよめりオキビはオコリビの約コリの反キ オキハオキヒノ下略

○灯花をば丁子頭といふも近俗の語にあらす今物語に信実朝臣作待賢門院の堀川、上西門院の兵衛おとゝひなりけり夜ふかくなるまでさうしを見けるにともし火尽たりけるにあふらわたをさしたりければ世にかうはしく匂ひけるを堀川

ともし火はたきものにこそ似たりけれ

といひたりけれは兵衛とりあへす

ちやうしかしらの香やにほふらん

と付たりけるいとをかしかりけりとあり又此丁子頭といふもの出来れは外よりよき物くるゝといふ俚諺も西京雑記巻三云樊将軍会問陸賈曰——賈応之曰目瞬得酒食燈火華得銭財云々 是なり

○女なとのうらむる事あるをそれともいはずすねて居るを人をふすべるといふも古語なり蜻蛉日記にへもしほやくけふりの空にたちぬるはふすへやしつるくゆるおもひに、などとなくさかしらするまでふすべかはして此頃はいとゞ久しう見えずと云々 枕草紙にくるしげなる物おもふ人ふたりもちてこなたかなたにうらみふすべられたるをとこと云々 元真集に久しうこずとてふすべて出ぬ人にと云々 是等見つへし又すねるといふは、古語にくねるといひし転語なるへし、クとスと同韻通す源氏紅葉賀にまつくねくしうらむる人の心やふらしと思ひてと云々、紅梅に云うるはしうもあらぬ心はへうちましし、なまくねくしきことも出くるときくあれど、云々 是等今俗すねくしといふ意と聞ゆ

○所ボツソクといふは、南朝の准后親房公、東奥を治給ふ時、地下の由緒を捨す用ひて、国人の筋目を正し、座を定椀飯

の儀式をたつる、是を所法則と云

○俗に溝をセヽナギと云も、頭昭陳状に、かひやがしたの事を論する詞に云、かひやがしたとは其屋の下敷、それも蛙鳴てんやと尋侍しかは其下にはみぞせゝなぎなどもあれは蛙すみて鳴事一定なりと云々

○俗、笑ひいりたるをキウ〳〵いふて笑ふと云、狭衣に、そゝはしるなればきぬのすそをひきとゝむるにや、たふれぬ、きう〳〵とことさゝめき笑ひいりつゝといへり

○俗に、妾をめかけと云、同書に、さやうのほそきんだちのかけめにておはせんよりは、たゞこゝろみ給へおとゞの御さいはひにてこそおはせめと云々、いにしへかけめといひしを、誤りて今めかけといふなるへしてかけは、めかけの転語なり、かけめとは陰女の義歟萬葉に隠嬬とよめり

○蜻蛉日記にそんわうのひがみたりしみこのおとしたねなりと云々 おとしだねおとし子など今俗にもいひ伝へたり

○世俗に、何ヅク彼ヅク銭ツク金ヅク、なといふ詞も尤太古の詞と見えたり、古事記応神天皇段云汝有レ得二此嬢子一者避二上下衣服一量二身高一而醸二甕酒一亦山河之物悉備設為二宇礼豆玖一云爾云々 遊仙窟云且取二双六局一来共二少府公一賭レ酒僕答曰下官不レ能レ賭レ酒共二娘子一賭レ宿云々

○鄙俗の語に頬を、ほゝかまちといひ又打擲を、ハルといふ、たとへはホヽカマチハルなといへるも、いにしへよりの俗語と見えたり今物語に云伏見中納言といひける人のもとへ西行法師行てたつねけるにあるしはありきたがひたる程にさむらひの出て、何事いふ法師そといふに、ゑんにしりかけてゐたるを、けしかる法師の、かくしれがましきよとおもひたるけしきにて侍ともにらみおはせたるに、みすのうちにさうのことにて、秋風楽をひきすましたるをきゝて西行此さむらひにもの申さんといひけれは、にくしとはおもひなから立よりて何事ぞといふに、みすのうちへ申させ給へとて

　ことに身にしむ秋の風かな

といひたりけれはにくき法師のいひことかなとてかまちをはりてけり後に中納言帰りたるに、かゝるしれものこそ候つれ、

はりふせ候ぬと、かしこがほにかたりければ、西行にこそありつらめ、ふしぎの事なりとて、心うがられけり、此さむらひをばやがておい出しけり云々 和名鈔云、顴和名加波知又云顴頰骨也或云輔車云々 海士の刈藻物かたりに、あまりにはしらのたちけれはにや、侍従をひきかなぐりうちはりなどしてといへり

○俗浴するを、ゆかはといふも古語也、允恭紀に沐浴

○物書たるがつたなきを、みみずのやうにといふも、信明集に云かへりことに、みゝず書をしておこせたれは

わひしきに恋にまとへる心にはそのことゝしもみえすそ有ける

是も手のわろきをいへり、蚓の跡の土に残りたるやうに、その事とも見えかたきとなるへし、又鳥の足がたのやうにといふも、松蔭中納言物語山の井巻に云かぎりにこそ侍れ、我ゆゑに御つみのふかくわたらせ給はんこそ心にかゝれと、鳥の足がたのやうにいとはかなく書たりと云々

○手をテ、といふも神楽歌に大宮乃知以左小舎人手々仁也手々仁也玉奈良婆手々仁也と云々 袋草紙にてゝゑひあしゑひ我ゑひにけりともよめり

○日本紀私記神武紀 大急之波世志と訓す今俗セハシ、といふ詞是歟シとセ通ス

○児女の酸漿をふく遊ひも、いにしへよりの事なるへし栄花物語に云御いろしろうるはしく、ほゝづきなとを吹ふくらめて、すゑたらんやうにぞ見えさせ給ふといへり

○僧の隠女ある、其女を、大こくと云は一書云唐鄭熊番遇雑記有僧妻者謂火宅僧といへり、是等を仮名書の物に見誤りて火たくの火ヲ大よみたくヲこくと誤り、大こくといひ伝へしにやといへり

○諺に人のなさけは世にありし時といふは菅公御百首

〽あはれわかうき時つるゝとももかな人の情は世にありしほと

○又あはひの貝のかたおもひといふは萬葉集第十一

伊勢の海士の朝な夕なにかつくてふあはひの貝のかたおもひにして

とよめり此歌より出し諺なるへし

○俗、水へ物の落る音をヅブリといひ又ザブリとなどいふも、近俗ならす大和物語をとめ塚の段に、此ひらばり、川にのぞみてしたりければ、つぶりとおちいりぬといへり、又宇治拾遺第三に此わたし船に、廿余人の渡る者づぶりとなげかへしぬと云々 又第十一に西に向て、川にざぶりと入と云々 又物のだふど落るなといふは、塔落と書へし、字彙塔託甲切、物堕声とあり

○心にすゝますしてなすわさを、しぶ〳〵にするといふも近俗ならずおちくほ物語に云御文とて給へばしぶ〳〵にとりてといへり、又宇治拾遺第五に、童しぶ〳〵に法師になりけりとも見えたり

○小児などの泣べきおもゝちするを、かひをつくるといふも同巻に彼童の法師になりたるをるいふとて云、つゆむかしにかはらす、僧正うち見て、かひをつくられけりといへり

○稟稽を、すべといへば左言にやと思へばさにはあらさるへし、同巻第七にあるにもあらす、手ににきられたる物を見れば、わらすべといふ物たゞ一筋握られたりと書り又燈心を、とうしみといふも栄花物語こまくらへの巻になぬかゞうちにやかてまんどうゐせさせ給ふへけれはあぶらとうしみまでもてのほらせ給ふと書たりとうしんといふは却而あしゝ和名鈔燈心和名度宇之美とあり又教るをおすへるといふも浜松中納言物語第一に云ふけうのつみいとおそろしとおすへさせ給ふと云々

○何方もといふへきをドッコモといふも此頃の俚諺にはあらす幽斎翁九州道記　宗易

返し　幽斎

〳〵あまさかるひなの住ゐと思ふなよとつこもおなし浮世ならすや

〳〵あまさかるひなには猶そゐたむなきとつこもおなし浮世なれとも

ゐたむなきは今俗のいふゐとむなき也是は今所謂狂歌の躰なるへし、しかれとも、今の世のことからにはかはりて、一首の意俗ならす、今狂歌を好む人に、狂歌といはずしてひなぶりなと称する人あり是は狂歌の字を嫌へるにや、又名目の拠なしと思へる歟、ひなぶりとは神代紀下照姫の歌を夷曲といへるをおもへる歟、しかれとも、古今の序に久かたのあめにしては、此歌にはしまるよし、和歌の始とも貫之ぬしの書れしを、いかて私に狂歌の事とすへき狂歌といふ名目いにしへに拠なきにあらす、喜撰式云、病苦雖レ不レ去又有何過然而 詠誦声不レ順由也誠是狂歌云々 又明月記建保三年八月廿一日参内――按察可レ参之由女房申レ之忽押連歌被レ待彼参之間有狂歌合云々 略文 しかれは是等を名目の拠にてたゞいひならはせるまゝに狂歌とぞいはまし

○人の口に物をふくみたるをホヽバルと云も古語の転なり、万葉集第二十に〳〵このてかしはのほゝまれどゝよめり、マとハ通シレとル通ズホヽバルと同語、是はこのてかしはの芽の開へき程になりたるが人の口に物をふくみたるかたちに似たればしかよめり人にツボロといひ花にツボミといふ花の咲開も人の口をひらき、又ゐむに比していへり

○俗に、物の相応せるをふさふといひ又ふさはぬといふも古語なり、古事記上、日子遅神歌許礼婆布佐波受とあり又万葉集第十八〳〵あづまをさしてふさへしにと云々

○枕草紙に、過にしかたこひしき物、ふたあゐえびそめなとのさいでと云々 後撰集秋下詞書に紅葉と色こきさいでをと云々 栄花物語鳥辺野の巻に、さま〳〵の色のきらめきたるさいでなとをつくりたるやうにと云々 袖中抄にも其さいでをとりでといへり此さいてとは絹切レをいふしかるを、今俗鍛冶の家に、つぎ切レをさいでといふ是等はきはめていやしきものゝ口に雅語の残りて、おもひもよらぬ所にて聞侍しがをかしきなり

○今俗餅をアタタキといふ古語也新猿楽記に温餅と見えたり又鄙俗の詞に米をシヤリといふは古語を伝へ誤なり同書に麦をシヤリと訓す

○諺に牛に引れて善光寺参りといふは一書に云善光寺旧記云むかし此国に齢七十に余る姥ありけり後世に志す事をもしら

で年月をくらしけるある時織上ゲたる布をさらすとて川辺に出けるに大なる牛はなれ来りけるが彼布を角にかけて走ければ姥大に驚跡を追ふて行けれは当寺の内へ入けり姥こゝに到りて始て此御寺を見てこはいかに我此年におよふまてかゝるいかめしき御寺のありけるをしらさりけるよとおもひて僧徒にあひて事のやうを尋れば有かたき事かきりなし姥それより後世にもとつきけると云々 世のことわさに牛に引れて善光寺参りとかいふめるといへり今案ニ今昔物語震旦部第七云今昔震旦ノ予州ニ一人ノ老母アリ若キヨリ邪見深シテ神道ニ仕ヘテ三宝ヲ信ゼス世ノ人コゾッテ此ヲ神母ト云フ三宝ヲ嫌カ故ニ寺塔ノ辺ニ不ニ近付一若道ヲ行ノ時僧ニ値ヌレバ目ヲ塞テ過ヌ而ル間一ノ黄牛有テ神母ガ門ノ外ニ立リ三日経ルニ更ニ牛ノ主ト云者ナシ然レハ神母此神ノ給ル也ト思テ自ラ出テ牛ヲ家ニ引入ントスルニ牛ノ力強シテ不引得神母自衣ノ帯ヲ解テ牛ノ鼻ニ繋グ程ニ牛引テ逃ヌ神母追テ行ニ牛入ヌ神母此牛及帯ヲ惜カ故ニ自ラ塞テ寺ニ入テ面ヲ背テ立リ其時寺ノ衆僧驚出テ神母カ邪見ナルヲ哀ム故ニ各南無大般若波羅蜜多経ト称ス神母此ヲ聞テ捨テ走出テ逃ヌ水辺ニ臨テ耳ヲ洗フテ云我今日不浄ノ事ヲ聞ツ所謂南無般若波羅蜜多経也ト嗔テ三度此事ヲ称シテ家ニ還リヌ其後神母身ニ病ヲ受テ死ス下略 其後神母嫡女ノ夢ニ告テ曰嫌フトイヘトモ般若ノ名ヲ耳ニフレタル功徳ニヨッテ忉利天ニ生セントス云々 彼善光寺の旧記といふ物是を摸せる歟

○金葉集に大路に子を捨て侍りけるおしくゝみ(ツヽミ物也)に書付侍りけるうた

〻身にまさるものなかりけりみとり子はやらんかたなくかなしけれとも

今世俗の諺に子を捨る藪はあれと身を捨る藪はないといへるも是より出たる成へし但し此藪といふををさなき人はたゞ竹林をのみいふと思へりさにはあらす和名鈔云呂氏春秋曰沢無レ水曰レ藪(ト和名也不云々) 又荊をもヤブとよめり同書越中新川郡大荊(於保也布)とあり赤染集に

〻しけかりし萩のやふこそ恋しけれしかはかりたに我宿はなし

是は萩のやぶともよめるに知るへし

○今俗物を誉るによう〳〵と云今物語云下毛野武正といひける随身関白殿の北のたいのうしろを誠にゆゝしけにて通りけるにつほねのさうしよりあなゆゝしはとふく秋にこそおもひまゐらすれといひたりければついふされ（此ことは未詳）といひてけり女心うげにてかくれにけり随身所にて秦の兼弘にあひて北のたいのわらはにさん〳〵にのゝしられつるといひければいかやうにのゝしれつるぞととはれてはとふく秋とこそおもへといひしといふに兼弘聞てくちをしき事のたまひけるかな府生とのをおもひかけていひけるにこそへみ山出てはとふく秋の夕暮はしはしと人をいはぬはかりそといふ歌の心なるへしはしとまり給へといひけるにこそ無下にいろなくいかにのり給ひけるぞといひければいて〳〵さては色なほしてまゐり来んとてありつるつほねのしも口に行て物うけたまはらんたけまさはとふく秋ぞよう〳〵といひたりけるいとをかしかりけりと云々 此よう〳〵といへる今いふとおなしき歟

○俗に昨夜の事をゆふべといひて夕の字をひとつになせるは非なるへしようべともよんべともいふへし昨夜（ヨンベ）万葉（ヨウベ）晩上同（ユフベ） 又今夜をよさりといふはよし大嘗会田歌にたがよさり妻やと云々 よさりとは春されは秋されはなどいふかことし万葉集第七うはたまのよるさりくれはと云々

○昨日をきのふといふは前（サキ）ノ日といふサを上略してノヒのヒをフと通してきのふといふかと思ひしを契沖師云日本紀（ニキス）昨日仁（キス）崇神徳 昨夜共にキスとよみたれはきのふとはキスノ日といふスを中略してヒフをかよはしたるなりと云々 まことに万葉にはキスのスをソと通して伎曽母（キソモ）許余比毛（コヨヒモ）また伎曽許曽波（キソコソハ）児呂等左宿之香（コロトサネシカ）などよめりされは昨日をキスといふ故に明日をアスとはいふ成へし明後日をアサツテとは明日去又（アスサツテ）の日也源氏浮舟巻にあさつてはかりといへりけふとは此日といふコノのノ文字を略してコとケ通していふなるへしヒフは前のごとし

○旧本今昔物語巻廿五云、今ハ昔、腹中ニ寸白持タル女有ケリ人ノ妻ニナリテ懐姙シテ男子ヲ生ケリ其子ヲハ○○（名ヲ闕）トソ云ケル漸長（ヤウオトナ）ニ成冠ナドシテ後、官ヲ得テ、遂ニ信濃守ニ成ニケリ始其国ニ下リケルニ坂向ノ饗ヲ為（ナシ）タリケレバ守其饗ニ着テ居タリケルニ守ノ郎等モ多着タリ国ノ者共モ多集タリケルニ、守饗ニ付テ見下スニ守ノ前ノ机ヨリ始テ畢（ヲハリ）ノ机マデ、胡桃（クルミ）一

種ヲ以数ニ調ナシテ悉ク盛タリ守此ヲ見ルニ、為方ナク佗シク思テ只我身ヲ絞ヤウニス、然ハ思佗テ守ノ云、何ナレハ此饗ニ、此胡桃ヲハ多盛タルゾト問ヘバ、国人ノ申サク此国ニハ胡桃ノ木多候也ト答レハ守弥為方無佗シク思テ只身ヲ絞ヤウニス○○○○迷テ術無気ニ思ヘル気色ヲ、其国ノ介ニ有ケル者、年老テ、万ノ事知リ物オボエケル有ケリ、此守ノ気色ヲ見テ、怪ト思テ思廻ニ、若此守ハ寸白ノ人ニ成テ産タルカ此国ノ守ト成テ来タルニコソ有メ此気色ヲ見ルニ極心不レ得、是試ト思テ胡桃ヲ旧酒ニ濃摺入テ、熱ク涌シテ国人ニ持セテ、此介ハ、盃ヲ折敷ニ居テ目ノ上ニ捧テ、畏タルヤウニテ、守ノ御許ニ持参レリ然レハ守盃ヲ取タルニ、介提ヲ持上テ盞ニ酒ヲ入ルニ酒ニ胡桃ヲ濃摺入タレバ酒ノ色白クシテ濁タリ守是ヲ見テ糸心悪気ニ思テ、此酒ノ例ニモ似ズ濁タルハ、何ナル事ゾト問ヘハ、介答云、此国ニハ、事ノ本トシテ守ノ下リ給坂向ニハ、三年過タル旧酒ニ胡桃ヲ濃ク摺入テ在廳ノ官人瓶子ヲ取テ守ニ奉レハ守其酒ヲ食事定レル例ナリト事々シク云時、守是ヲ聞テ気色弥只替リニ替リテ飾事無レ限然レトモ介ガ定リデ是ヲ食フ事ナリト責レバ守飾々盞引寄スルマヽニ実ハ寸白男更不レ可レ堪ト云テ散ト水ニ成テ流失ニケリ云々下略 あやしき物語なれとも古書にかくしるし置れし事ゆゑあるへし是を見れば胡桃は能く寸白虫を治すへし用ひ試て虚実をしらまほし又今俗伊勢へ参詣せし人の下向を迎ひに出て坂迎として饗する事有是は京都の人は逢坂までむかひに出饗する故坂向といふそれをならひて何方にても坂向といふ事となれりといへど前文を見れはいにしへ国守などの入府を国境にてむかへ饗するを坂向とはいふと見えたればもとよりいつくにてもさかむかひといふへき事也境迎の異語成へし逢坂の説は後人附会の説と知られたり

○今俗小鰕にアミ雑魚アミ醤と呼ふ物り此アミといふは此小鰕の名なり和名鈔海糠魚阿美 とあり是成へし山家集に云備前の小嶋と申嶋にわたりけるにあみと申物をとる所はおの〳〵われ〳〵しめて長きさほにふくろを付てたてわたすなり其さほのたてはしめを一のさほとそ名付たる中に年たかき海士人たてそむるなりたつるとて申なることばきゝ侍しこそなみたこほれて申はかりなく覚えてよめる

へたて初るあみとる浦のはつさほはつみの中にもすくれたる哉

和名鈔に所謂海糠魚是なるへし今海糠醤備前を名産とする事も此山家集のこと書にしるへし新猿楽記にも備前海糠といへり又鳥にアミといふ物有袖中抄に

〻みなくゝるあみの羽かひのかひもなく人を雲井のよそに見るかな

是は鳥なりあにともおほあにともいふといへり此鳥可考

○紐をひぼといふも片言にはあらす濱松中納言物語に云みすのほとにむらさきのかうのすそごの御几帳うちあけてかうくみのひほながやかにうるはしきといへり

○今色めくなまめくなどいふ言葉は雅俗ともにいふことはなり此メクと云は向也メとム通あためくなといふはアは発語にてアダとは他也メクは向也他にむかふ也万葉集に異手枕なと書る同意

○俗大なる木などをちひさく切こしらゆるをコナスといふは木作なるへし此こなすといふも古語也うつほ物語俊蔭巻にいみしき女おきな子ともむまこなど居てかうへをつとへて木をきりこなすと云々

○しこふちといふ詞壜嚢抄云日本紀忌部連色弗と云人アリ是ヲ見レハ色弗ト書ヘキニヤ件ノ人形躰ゲスシクシテシコブチナリケルヤラン云々 此説いかゝ今案にうつほ物語祭使巻にしこふちにふるめきたる箱二つと云々 俗にぢやうふなる箱といふに同し醜物と書へし 日本紀醜女万葉ニ醜乃益雄鬼乃醜草なと書り 今俗健肥者をしこふつなる人といふもこれなるへし

○俗に少の事を露ちりほとといふもうつほ物語吹上巻にいとけうある人に見たまへつきて露ちりも参り侍らさりつるといへり又露ほともといふも海士ノ刈藻物語に

〻たのめ置しめしか原の露ほともあはれをかけて君たにもとへ